パラレルな画布の光景

日野　笙子

何故に人は描こうとするのか
描かれなかったことへの夢か羨望か
それとも描いてしまうという
沈黙のためなのか

天窓から夕陽が射した
手向けのように

海が泣いている
青空が泣いている
あの人が手放しで立ち
泣いているから
もうかなしみの絵は描くまいと
鎮魂のテーマを選ぶまいと
せめて夕映えの色を選んだのだが

同時にわたしは
半生の汚れを描いていたのだ

何層もの下塗りした
半世紀の画布に
いくども色を重ね
いくどもブラッシングした
そして画布が裂かれ
内蔵が描かれ

そんなふうに
パレットナイフを使っていたのだ

わたしを慫慂するのは
決して戻れぬところ
もうひとつの
平和という世界に似せた光景

失われたものと
これから描かれるであろう
その淡いあいまに
上澄みのごとく
現れたものは
哀悼の向こうで
けっして交わることがない
パラレルなまなざし

描く人は自分がその画布の中で
別の光景にスライドしたことさえ
もう気づかない